

## 笑顔であふれる世界

氷川町立氷川中学校二年

上森 叶愛

「宇宙人みたい！」

小学生のころ、友達と遊んでたら、突然このようなことを言われました。

私は一瞬何を言われたのか理解ができませんでした。少し時間が経ち、何を言われたのかやっと理解ができました。

私は生まれつき左手の中指がありません。自分が小さいときはあまりそのことを理解できていなかったのも何とも思わず過ごしていました。でも小学生になって、周りから手のことについて何か言われていると感じるようになりました。それを母に話すと、学校で少し時間をとってもらってみんなの前で私の手のことについて話してくれました。でもその話をしてから、「手、みせてー！」と言われるようになりました。私は手を見せるのがいやでした。だから話をそらしたりしてなるべく手を見せないようにしていました。

そんなある日、友達に言われたのが「宇宙人みたい！」

いてくれるから、そういう不安に負けずにがんばりたいです。

「宇宙人みたい」

たったその一言で人は傷つきます。でも、支えてくれる人がいると、笑顔になることができます。私も、これまでに支えてもらった分、だれかを支えていけるといいなと思います。

と言う言葉でした。すごく悲しかったです。小学生の低学年の間はそのようなことが続き、辛い日々でした。高学年になると手のことについて言われることは少なくなりましたが、リコーダーなどが始まって左手の指が一本ないから不便だったし、隣の人と手の動きを確認する時間等があつて、とても嫌でした。習字のときも、左手で紙をおさえておかないといけないから、できるだけ誰にも見られないように書いていました。とても仲がいい友達にはふつうに手を見せられるけれど、あまり親しくない人には見られたくないと感じ、たまに「左手がちゃんと五本あったらどんな感じなのかな？」と思ったりすることもありました。でもそういうことを母に言うと産んだほうが悪いと言っているようになってしまふ気がして、あまり言えませんでした。中学校を卒業するまでは、ほとんど小学生のころからいっしょの人しかいないから、そんなに不安ではないけれど、高校から先は不安でいっぱいです。でも周りには支えてくれる人たちがたくさん

## 「支え合うこと」

睦沢町立睦沢中学校 三年

木村 涼梨

私は施設で暮らしています。この施設には障害をもった子もいます。その中の一人の女の子とは、八年間一緒に暮らしています。その子は四歳の時に入ってきました。四歳なのに立って歩くことも、しゃべることもできませんでした。

その子と出会ったとき私は正直なところ、怖いという印象をもちました。その子は、お風呂の時間になると、お風呂を嫌がって暴れたりしました。その度に、職員がその子につきつきりになります。その子は言葉が話せないなので、その時の感情を叫んだり、自分の頭を思いっきり壁に打ち当てたりすることで、表現したのです。

私はなぜこのような行動をとるのか理解できませんでした。しかし、職員の方から「この子がお風呂に入るのを怖がるのは、自分の背丈よりも深いお風呂に入らされるからなの。溺れるんじゃないかって恐れているから。」この話を伺い、その子を怖いと思う先入観はこっぴどく打ち砕かれ恥ずかしい気持ちになりました。

りました。こんなとき、その子はうれしそうに笑ってくれるのです。つい私の頬も緩んでしまいます。

こんなふう交流し始めると少しずつ、その子と私との関係が深くなるのを日に日に感じました。私はその子とのことで心に焼き付いている出来事があります。職員の方と私とその子で初めて買い物に行ったときのことです。その子は「買い物に行くよ」というと、四足歩行で必死に私たちの所へ来て、即座に泣き叫んだのです。とても嬉しかったのだと思います。車に乗り込み、お店に到着すると、私の手の指にぶら下がり、私より前を歩き出したのです。そして、お店にいたお客さんや売り物をじつくりと見たり、かなり長い時間、笑顔ではしゃぎ回ったりしました。私の指はちぎれそうなくらい痛かったのですが、天使のようなあの笑顔を見ていると、それも忘れませんでした。

現在、私とその子は、職員の方からはハッピーセットと呼ばれています。二人三脚で支え合っているということだと思っています。その子は今、自分の力で歩く訓練をしています。「頑張れ」私はその子を心の中でいつも応援しています。ただ、私もその子から笑顔や元気をいっぱいもらって寂しさを吹き飛ばしています。

「みんな違ってみんないい」は私が好きな金子みすずさんの詩の中の言葉です。健常者の方は障害者の方に対し

このことから、私は障害をもった人に対して、たんにうわべだけで判断するのではなく、どうしてそういう行動をとるのかを考えなければいけないことを悟りました。

それから、三年ほど経ち、その子が年長になった頃です。その子はクレーン行動といって、職員の方の指などにつかまり、少しですが、歩くことができるようになっていました。夕方、私が宿題をやっていた時のことです。机の横から、その子はひよこつと顔を出してこちらを見ると、はじけたような笑顔。今でもはつきりと覚えています。今までは、その子をそれほど気にしたことはなかったのですが、可愛いと思い、その子のことをもっと知りたいと思うようになりました。ただ、その子は警戒心もあり、怖がらせてしまつとまづいと思い、まずは、その子と私の視線を合わせて挨拶をしました。次に一緒に何かをしようと思い、テレビで流れるダンスを踊ったり、天気の良い日には、屋外に出て田んぼの周りを散歩した

て、「可哀想だな」とか「怖い」とか思わず、受け入れてほしいと思います。そのために、まずは、障害者の方とを理解していくことが大切だと思います。障害をもった方の行動の一つ一つには必ず意味があるのですから。また、障害をもった方とふれあうには、同じ視線になることが大切だと思います。そして、一つのことを一緒に汗を流して取り組んでいくとよいと思います。私はこれらのことを行い、一人の人間としてその子と交流できるようになったからです。

## ハンセン病患者と触れ合っ

〜過ちを繰り返さないために私ができること〜

盈進中学校 三年

藤本 暁

私は中学一年生の時からある場所に通い続けている。それはそこに、私の会いたい人がいるからだ。

その人とは国立ハンセン病療養所長島愛生園に暮らす田村保男さん(92)だ。彼は高校生で長島愛生園に入所した。私が田村さんに出会ったのは長島愛生園にある病院だった。とても優しい人で笑顔がすてきな方だ。しかし田村さんもハンセン病に対する差別の被害者だ。ハンセン病患者は人からも社会からも差別された。ハンセン病に感染すると手足が麻痺し顔が歪むことがある。その見た目から差別や偏見を受け続けてきた。地域から感染者をあまり出し、見つけ次第療養所に強制収容させることを定めた。それが「らい予防法」だ。ハンセン病患者を自分達の町から排除させるように「官民一体」となり徹底して強制収容させた。それが「無らい県運動」だ。この事実を知った時、二度と繰り返してはならないことだと強く感じた。

田村さんは妹がいる。彼にとって大切な存在の妹も、田村さんと同様に差別された。ハンセン病に対する差別

は決して患者だけでなく、その家族も差別の被害者だった。田村さんは悔しそうに語った。「わしがこの病気になって中学生の妹は、病気じゃないのに、『来なくていい』と学校に言われた。卒業証書ももらっていない。わしが病気になったから妹も病気になるはずだと学校も友達も妹を避けた。トイレもまともに使わせてもらえなかった。あまりにひどい差別だから誰にも言えなかったんだよ。自分が強制収容されたことより、妹が受けたいじめと差別はどうしても許せんよ。」私は心が締め付けられた。クラス内だけでなく、学校側までも差別に加担したのだ。それほど「ハンセン病はうつる病気だ」という誤った認識が広がっていたのだ。

転校した小学5年生の頃、私自身も仲間外れにされた経験がある。当時の私は、昼休みでもみんなが遊んでいる風景を眺めることしか出来なかった。「このまま卒業するのかなあ…」と不安を感じていた。そんなある日、教室で遊んでいた何人かが私に「一緒に遊ぼう！」と声

その思いを伝える側になる。」

をかけてくれた。嬉しくて叫びたかった。その時の友達とは今でも仲が良い。当時の私と田村さんの妹とは重なる点があるように思う。彼女は「ハンセン病患者の妹だから」、私は「転校してきたから」という理由で仲間外れにされた。妹の話聞いた時、その悲しみや苦しみが当時の経験と重なり、胸が苦しくなった。私にはそんな友達の存在があった。その存在は、私にとって心強いものだった。だからこそ、あの時の友達が私にしてくれたように、私も誰にでも優しく出来る人になりたい。中学生になった私は、少しずつ積極的に仲間作りをしようと思がけた。中学三年生になった今、友達は私にとってかけがえない存在だ。あの時声をかけてくれた友達に少しでも近づけたらどうか。あの時の自分と似たような境遇の子がいたら、勇気を出して声をかけることが出来るだろうか。一緒に何かしようかと誘われたら、誰だって嬉しいはずだ。これから学校生活、社会生活を送っていく中で、以前の自分のように一人でいたり、いじめを受けている人がいたら、相談に乗り、自分から話しかけて、最終的には笑い合える仲間になる。そのきっかけとなる行動を私はしていく。

田村さんのお話を聞いた後、「二度と同じ思いをする人がいなくなるように。」と握手を交わした。その時私は、「このように思った。」「次は、私達が田村さんの人生と、